

TOKYO美人と、東京100ストーリー

心は翼 連載⑥

(014 後樂園)

穂高健一



井伊佳元は、旧古河庭園で
嶋野佐和子と別れてから、八ヶ
岳にとんぼ返りだった。かれの
車は首都高に入り、中央高速道
の須玉で降りると、国道141
号線に面したコンビニに立ち
寄った。井伊は手際よく、おにぎりや乾き物を調達してから、
急ぎ松原湖の方角にむかった。
できれば日没まえに、松沢ロッジ(標高2240m)に入りたい。

「いまはまだ、この場所だ。かなり強行軍だ」

赤岳の雪の山容が右手に迫ってくる。清里の手前ではJR小
海線と交差し、そのさき野辺山の最高地点を過ぎた。

突っ走るかれは、稲子登山口(標高1240m)から本沢ロッ
ジまで、読みにくい積雪期の所要時間を推し量っていた。

だれかが登ったトレース(雪道)が残っていれば、登攀のス
ピードは上げられる。踏み跡がまったくない

深雪となると、松沢ロッジには真夜中か、明
朝の到着になるだろう。

「大幅に遅れたところで、三枝は怒る男じゃ
ない」

セーフティー東中野店の三枝店長とは、松
沢ロッジで合流する約束になっている。

三枝は高校、大学ともに山岳部員だった。
セーフティーでも、リーダー的な山岳部員だ。

会社では上司に逆らわないイエス・マンだ。生真面目な男だが、
ひとたび山に入ると、人間が変わったように危険を怖れず、大胆
になる。十代から積雪期の八ヶ岳に登っているし、八ヶ岳連峰に
くわしい。



少女誘拐事件の突破口を開くには、事件が発生した当時の状況
を知るものから情報を集め、それを積み重ねていく必要がある。
今晩は時間をかけて、三枝に21年前の少女誘拐事件について、
じっくり語って聞かせるつもりだ。事件を話すうちに、これまで
気づかなかった新発見、事件解明の盲点、あるいは三枝から犯

人追撃のヒントなどが得られるかもしれない。そのためにも、
今夕にはロッジに着きたい。

その一方で、冒険スキーヤーの山崎勉について考えた。

（胡散臭く、得体の知れない男だ）

山崎は21年前の八ヶ岳に精通する点では貴重な存在だ。ただ、
口達者で、話の内容にも虚飾、脚色がある。そのうえ、山
崎勉は東京総合医科大学病院で、整形外科の病棟に入院していた。
そこには嶋野佐和子が入院していた。これは単なる偶然なのか。
それとも、山崎は悪魔の影をもつ男なのか。

「山崎はすくなくともマークすべき人物だ」

そのためにも、稲子リゾート温泉のペンションで、彼の妻に会
っていく。本沢ロッジの到着が多少のところ遅れても、これは欠
かせない。

野辺山からカーブの多い急な下り坂になった。牛が放牧された、
牧場風景が広がる。井伊のケイタイが鳴った。表示は『毎朝長野
新聞』の元記者の芦野守だった。先の新聞とは別の情報があつ
たのか。それを連絡してくれたのか。

井伊は車のスピードを落とした。そして、芦野とは軽い挨拶を
交わした。

『いちど井伊さんに会って、話したい。できれば早いうちに。
きょう明日にでも。私のほうから東京に出向いてもよいけれど…
…？』

なにか、新しい情報の提供でもあるんですか？

『いや、逆だ。私は元ジャーナリストだ。寝た子が起きてしまつ
た。21年前の奇怪なできごとを、私なりに追跡してみたい。協
力してもらえないだろうか』

どんな協力ですか？

『蓼科の坪庭で遭難死したはずの、5歳の嶋野佐和子が生きて
いた。井伊さんがもっている、情報を共有させてもらいたい』
彼女は一度たりとも、死んでいない。区役所で戸籍を抹消し
ないかぎり、死亡とはいわない。

『理屈はそうだが、捜索のうえでは死亡扱いにされた。いまと
なれば、遭難でなく、事件だった可能性が高い。それが闇に隠
されて、現在まで及んでいいるようだ。これを掘り下げて、世に発
表すれば、センサーシヨナルなる記事にな
る』

一人の女性の傷ついた心は、メディアを
使った見世物じゃない。

『取材源の秘密は守る』

秘密は守る、だから喋れ、とはジャーナ
リストの身勝手な論理だ。彼女のためにも、
メディアで荒立てたくない。

『事件が世に出れば、読者から、21年前の蓼科スキー場の目撃
情報が寄せられる可能性が高い』

読者の情報協力など必要はない。ガセネタも多いはずだ。一つ
ひとつの情報を整理する、そんなヒマはない。おれ一人で充分。



『私には、井伊さんがフリーライターに思えてならない。同業ならば、私が取材に入るまえに、良いネタをつかんだ、あなたの了承は得ておきたい。古いことばだが、これは仁義だ。鳴野佐和子ともコンタクトを取らせてもらおう』

取材を受けるか否かは、鳴野佐和子さんの判断だ。

『いちおう仁義は切らせてもらった。少女が被害者となれば、両親の証言は重要だから、コンタクトを取るつもりだ。父親は元大蔵省の官僚で、インドの日本大使館、さらに大使なども経て、アメリカの大学で教鞭をとっている。これはまちがいないかな？』

さすがジャーナリストだ。わずか1日で、21年間の空白を上手に埋めている。

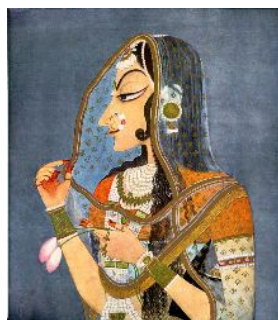
『それでも情報の収集で40数年も、飯を食ってきた。押えどころはわかっているつもりだ。鳴野佐和子の住まいだが、渋谷区幡ヶ谷一丁目……。これも間違いないかな』

彼女の住所は知らない。

『井伊さんは情報を独り占めにするタイプらしい。良きライバルになりそうだ』

あなたは新聞社のOBだ、組織を利用できる。おれは一匹狼だ。勝敗の分は悪いが、おれはわが道をいく。

『新聞社は外目とちがう。記者どうしの嫉み、妨害、偽情報、



足の引っ張りあいが行っている。内部はドロドロした集団だ。新聞社のOBだから、すべてがプラスにはたらくとは限らない。むしろ、あなたのようなフリーと手を組みたい、情報のギブ&テイクで』

答えは変わらない。

『井伊さんは強い信念の持主だ。これ以上話しても、気持ちを変わらないだろう。きょうにでも、鳴野佐和子に電話取材してアポを取り、あすには東京で会ってみよう』

電話番号も調べている、さすが元新聞記者だ。

『これだけは認識をともにしたい。……時効となった事件は法で裁けない。だが、犯人は社会的な制裁で、罪を被せられる。この認識は共有したい。必要とあらば、連絡してほしい』

その節はよろしく。さを急いでいるので。

車の速度を上げた。井伊の心には、芦野の電話が重く圧しかかっていた。……悪魔が新聞記者なみの情報力をもった人物ならば、佐和子の住所も、電話も割りだせる。いつでも、彼女の身边に近づくことができる。佐和子は狙やはりわれているのだ。

『芝浦達也、たのむぞ。佐和子をしっかりと守るんだ、ボディガードの役割は重要だぞ』

井伊が叫んだ。

松原湖入口の標識で、かれの車は左折した。ケイタイにSMSのメールが入ってきた。送信者は、池袋店のレジチーフで、

『池袋中央小学校の副校長先生が、きのう社会科見学の文集をも

って、店にきました。井伊店長は4日間の休みです、と伝えると、八ヶ岳のどこなの？ と聞かれました。小学校の先生だといつゝい氣を許し、本沢ロッジで泊まる、それしかわかりません、と答えてしまいました。プライベートな行動を教えてしまい、ごめんなさい。怒られる前に、謝っておきます。鳴野さんもしよとは話していませんからね』

という内容だった。

白樺林を抜けると、火の見櫓がある集落があった。そのさき道案内の『稲子リゾート温泉』の看板がつづいた。やがて、温泉付き別荘が点在してきた。多くの建物は色あせて古めかしく、高い樹木と雑草に囲まれていた。

錆が浮いた案内図のままで、かれは車を停めた。略図のなかに、ペンションの表示は見あたらなかった。車をすこし走らせると、活気のないミニストアがあった。店員に訊いてみたが、ペンションはむかしから実在していなかった。

「デタラメだったのか」

井伊は苛立ちをおぼえた。

かれの車が登山口にむかつた。

途中、火の見櫓のまわりには、法被をきた消防団員が集まり、半鐘を打ち鳴らしていた。

井伊は車を停めた。車窓から顔をだして訊けば、櫓の鉄骨が錆びて危険だから、取り壊すのだという。



櫓に登った団員が順番に、打ち納めだといいい、半鐘を鳴らす。かつては火事、鉄砲水、雪崩などの災害に使ってきたのだろう。団員の顔には郷愁に似た表情が漂っていた。

井伊は車から降りて、長老らしき人物に歩み寄った。そして、山崎勉の家をたずねてみた。

「勉なら2、3日前に、東京の病院を退院してきて、スキーこ出かけていった。あれは道楽者じや。山小屋は来月の営業に備えて、そろそろ忙しくなる、というのに」

「どんな仕事をされているんですか」

山崎の話は根底から信じないことにして、井伊は念のために訊いてみた。

「冬場は蓼科スキー場の民宿、春から秋は山小屋の番人よのう」端境期には松原湖のサイクリング屋、ボート屋などではたらいていることもある、とおしえてくれた。

「奥さんがペンションをやっているとか……？」

「勉の嫁なら、松原湖のペンションではたらいておる。さつき家の前で見かけたな。ペンションのつとめは朝方と、夕方よ。昼間は家にもどって畑をやっておる。3人の子を育てながら、変な亭主にもガマンして耐えておる。都会からきた女にしては、がまんぶよい感心な嫁じや」

「奥さんは地場のひとじゃない？」

「東京よ。若いとき八ヶ岳に登りにきて、勉の甘いことばに乗せられたらしい」

あぜん
咄然とした。山崎勉から聞いた話とはあまりにも違っていた。

「スキーの名手と、聞きましたか？」

そういうと、まわりの消防団員の視線が集まってきた。愉快な話題がでてきたと思っただけらしい。

「勉は大ホラ吹きじゃ。運動神経は最低、馬力だけの男よ。南国の高知の出だから、スキーは下手くそじゃ。高校生、中学生の実の息子よりも下手。陰で笑われていても、平気で、スキーの名手だとホラを吹く男よ」

長老がそう言うと、まわりがゲラゲラ笑いだした。

「スキーで大ケガされて、新宿の大学病院に入院されていたのでは……？」

「いや。ことし一番の大雪が降ったとき、勉は働いていた蓼科スキー場の民宿で、屋根の雪下ろしをしておった。足を滑らせて転落し、通りがかった雪上車に轢かれたんじゃ。いくらなんでも、民宿の屋根で、スキーはやらん」

まわりがふたたび大笑いとなった。半鐘がまた打ち鳴らされた。「この半鐘には、むかしからの想いがある」

1昔（10年）まえは、大雨のあと土石流が、上流の村を襲った。2昔（20年）まえは夜、別荘で子どもの花火遊びから火事が出たときに、打ち鳴らした。3昔（10年）まえは、硫黄岳の遭難で、猟師たちの手を集めたものと、長老はしみじみ語っていた。

「山崎さんの家に寄ってみたい。場所は？」

長老におそわった、山崎勉の住居は車で3分ほど先だった。質素な造りの家屋で、玄関から声をかけたが、留守だった。裏手の菜園にまわると、日本手ぬぐいで姐さん被りにした40代の女性あねが、野菜の苗を植えていた。

80キロの巨体の女房だときいていたが、その半分の細身だ。はたして、山崎の妻かと疑ってしまった。確認すると、山崎の妻にまちがいはなかった。

「ペンションでコーヒー一杯でも、というつもりで来たんですがね」

ここに至った経緯をかんたんに説明した。

「東京からわざわざすみません。冒険スキーなんて、大嘘です」
彼女はウンザリ顔だった。

「奥さんとは、見合い結婚だったと聞きましたが……？」

「それもウソです」

彼女が二十歳の記念に、友だち四人と赤岳に登った。泊まった山小屋で、勉がはたらいていた。『おれは八ヶ岳のヒッピー族だよ、哲学的な生き方がしたい、世俗な生き方が似合わない』という話がでてきた。彼女はそれに共鳴できたのだという。

「わたしも若かったんですね、信じるものがありましたから。結婚したからには、泣き言は通らない、とわかっていますけど。毎日のように、別れようかと思いいながらも、3人の子どもの将来を



想えば不憫で、決断がつかず、とうとうまる20年もきてしまいました」

彼女は苗の箱を移動させていた。

「ご主人の実家は、高知の網元と聞きましたけど？」

「高知出身はほんとうです。でも、網元はウソです」

4年半の長い交際を経て、結婚が決まったとき、彼女は挨拶に高知に向かった。雨漏りがするような掘った小屋の住居で、持ち船は一隻もなかった。うそつきね、といったら、漁網のロープの元を捌く漁師だから、網元だつて。こんな調子です、と彼女は歎いてみせた。貧しい漁師の倅だった、それをもって婚約を破棄する、という気持ちにはなれなかった。

中学生の息子が、きょう終業式だといひ、帰宅してきた。彼女は農婦から母親の顔になり、成績はどうだったの、答えられないのね、という。他方で、食卓にはおやつがあるから、とおしえていた。

「結婚されたころ、ご主人はこの山小屋でした？」

「本沢ロッジです」

「えつ、天狗小屋と聞いたけれど？」

「経営者がおなじですから、そちらもかけ持っていました。本沢ロッジの方には恩があるはずなのに、結婚した翌年には平気で別の山小屋に転職したひとです」

彼女が結婚前後のはなしを語りはじめた。ふたりは結婚した後、どこで所帯をもつか。勉が東京に出てくる、というはなしもあった。

た。本沢ロッジの先代の経営者が、勉には東京の水は合わない、所帯をこちらに持つなら、一軒家を安く譲る、と世話してくれたのだと話す。

「それがこの家です、結婚してから、今年でちょうど20年。これまで何回、山小屋を変わったことやら。一昨年、本沢ロッジで、また働いています」

転職のたびに、妻として恥ずかしい思いをさせられていると、彼女は羞恥の表情を浮かべた。

「過疎化がすすんだ影響で、山小屋も人手不足だから、引っ張りだこなのか？」

「山小屋って、ウソがまかり通る、変なところですよ。夫はモテ過ぎなんです。

……真冬の山で、ツキノワグマに襲われて格闘して、崖から落ちたと、夫が真顔で、身振り手振りではなすと、場が盛り上がり、聞いているほうも、そうかな、と思

つてしまうみたい。よくよく考えてみれば、熊は冬眠するでしょ。まあ、こんな調子。バカバカしいウソだから、下手な落語より面白いらしいの。見破られたら、夫はおどけてみせる。それがまた面白いみたい」

「山小屋の番人としては、適材適所なんだろうな」

「そうなんです。山崎のはなしが聞きたいと、登山者が山小屋に



宿泊してくれます。夫は『俺には客がついている』と天狗になり、山小屋の経営者から一言、ふたこと、小言をいわれたら、ふいと辞めて別のところに移ってしまうのです。口と腰がかかるいから、八ヶ岳の風来坊ともいわれていますけど……」

わが子に嘘つきの血が流れていないかと、冷や冷やしていると、彼女がそれを強調していた。

井伊は登山の時間を気にしながらも、

「ひとつお伺いしたい。21年前の3月、誘拐されていた5歳の少女が本沢ロッジで救出された事件があった。これについてなにか知りませんか」

「夫の話でしたら、信じないでくださいね。21年前なら、結婚した翌年です。そんな大事件があったら、わたしの記憶にも残っています。ふだん刺激がない村ですから、もう村中は大騒ぎになります。そんなことはありませんでした」

「事件の片鱗すらなかった……」

「ありません。3月の雪山に、5歳の子をどうやって連れて登るのですか？ わかりきつた嘘をつけるのは、うちの夫くらいです」

「ペンションで、客からそれらしい話が出たことはありませんか？」

「ありません。ただ、私はあのころ全部のお客さんと接したわけじゃありません。年3回は松原湖のペンションのしごとから外れていましたから」

「なにか別の仕事をなさっていたんですか」

「はい。東京の親戚筋が、進学塾の経営に関わっています。その塾が稲子リゾート温泉に二階建ての別荘をもっていました。そこで毎年、一週間の特訓合宿がおこなわれていました。期間ちゅうはその世話に追われていました」

生徒は鉢巻をして勉強、勉強、勉強と追われ

る。塾の講師はマシシーマンの指導のほかに、炊事、洗濯、掃除も一切合財の世話をする。しかし、講師だけの手ではすべてがまわらない。買出しとか、食事の下ごしらえとか、女手が必要だったので、彼女がその手伝いをしていたという。

「いまは少子化で、多くが一人っ子ですから、親は特訓で、わが子を厳しくされるのを嫌いますから、合宿はもうなくなりました。塾の別荘も、もう人手に渡っています。なかなか売れずに、苦勞したようすけど……」

「稲子リゾート温泉は、買い手がつき難いだろうな。窓越しに、硫黄岳の山容を観るだけしか値打ちがない、寂れて空家が増えるばかりだと、ご主人が話されていた」

「私たちが結婚したころから、別荘の売手が多くて、買い手が少ない、というはなしは聞いてきました。最近、別荘の空家が多く、消防団員の方が、流れてきたホームレスが無断で住み、火の不始末から火事を出されると怖い、と話しています。先月も、



長い間、無人だった別荘に、別人が住んでいたことから、お巡りさんを呼ぶ騒ぎがあったばかりです」

「話つきませんが、この辺で、ご主人になにか伝言はありますか。明日には硫黄岳で会いますから」

その伝言を受け取ると、井伊は本沢ロッジに向かう登山口に急いだ。

駐車場に車を停めたかれは、防寒服を着込み、靴裏に鉄製のアイゼンをつけた。ザックを背負い、

ピッケルを手にした。雪上にトレースはあったが、単独行の登山者らしい。たった一人のトレース

では、時おり、井伊の片足がずばつと腰まで埋まった。井伊は抜く

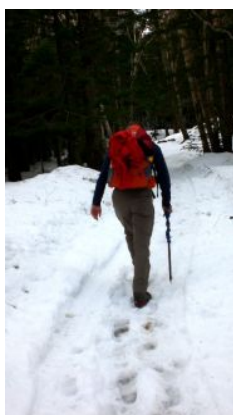
のに苦労させられていた。

標高1550メートルでは、樹林の合間から、陽光に光る、白い峰の天狗岳がみえた。心に染み入るような、見ごたえのある山だ。

ケイタイが鳴った。鬼頭部長だった。店長会議レポートの【つづき】のはなしだろう。井伊は無視した。一度は切れて、また呼び出しが鳴る。ケイタイの電源は切りたいところだが、鳴野佐和子から緊急連絡が入るとこまるので、それもできなかった。

広葉樹の裸木林に入ると、『圏外』になり、ほっとした。

標高1680メートルが過ぎると、森林が切れ、視界が開けた。



ケイタイが鳴る。また、鬼頭だ。夏休みだというのに、ウンザリされられた。

根負けした井伊は、電話に出た。

「いま、どこだ？」

「八ヶ岳の硫黄岳に登っています」

「じゃあ、本社に来るのはムリだな。練馬の江古田に住む柳下和男さんがこっちにきている。ベアリングの証明書を持つて、ひどく怒っているぞ。どんなクレーム処理をしてきたんだ？」

その口ぶりから判断すれば、鬼頭は柳下の恫喝に負け、たじろいでいる、と読み取れた。

「柳下は強請りの常習犯ですから、追い返してください」

「お客さまにたいして、そういう頭ごなしの態度がそもそも問題なんだ。柳下さんは、池袋店の店長に、厚揚げにベアリングが入っていたと説明しても、パチンコ玉だと決め付けて信じてもらえなかった。だから、証明書を取ってきたといっている。セーフティの店長は人格も、節度も、良識もないのかと、怒っているぞ」

「激怒したり、怒鳴り散らしたりしているのは、強請りの常套手段。気にすることないです。当初はあきらかにパチンコ玉でした。それが証拠に、見破られると、本人は2階から庭の雑草に投げ捨てたくらいですから。あの男のことだ、どこかで盗んできたベアリングを、検査に出したに違いない」

「店長から犯罪者扱いにされた、その精神的な苦痛の慰謝料も要求している。ベアリングの検査料と、休業補償を含めて、12万

円だ」

「1円も支払うことはないですよ。本社にきた、交通費を含めて」
雪上はツルツルのアイスバーンだ。井伊は靴裏の鉄製のアイゼンで、一歩ずつ、的確に足場を確保していた。

「問題はこの先だ。柳下さんが厚揚げメーカーの営業部長に問い合わせしてみたら、2万円の商品券を池袋店長に預けている、といわれたらしい。柳下さんはそれを受け取ってない。だから、店長が猫ばばした、と主張している。これは事実かね」

鬼頭が刑事のように問い詰める口調になった。

「商品券は持参してきた日に、営業部長に持ち帰らせました。それとも、部長はボクが猫ババしたと、疑っているんですか」

「もちろん、疑っている。急に夏休みを決めた、休みを取れば金もかかる。その小遣い銭じゃないのか」

「2万円で、人生を棒にふるませんよ」

「いましたが、私が直じきに厚揚げメーカーに問い合わせしてみた。電話にでた担当課長に、先方の経理課の出金を確認してもらった。……セーフティー井伊店長に、2万円の商品券、と計上されている、という回答をもらった。もう逃げ場はないな」

「営業部長に訊いてください。柳下のクレームは一人でやられていた。課長はこまかい話になると、わかってないはず」

「おなじ内容で、二度も問い合わせたら、セーフティー幹部の横領事件という恥を外部に晒すようなものだ」

「横領？」

「そうだ、横領だ。これから池袋店の事務員に、商品券が店長室に隠されていないか、調べさせるつもりだ。こちらが見つければ、前に、隠し場所を自白したらどうだ？」

携帯電話が、圏外で切れた。

「くそっ」

井伊はピッケルのシャフトで、ブナの幹をたたいた。枝の雪が防寒帽の上にどっさり落ちてきた。

井伊はなおも登りつづけた。樹木の枝には目印の赤いリボンが結ばれている。ルートはトレースとリボンとが誘導してくれる。

30分後には高度計が1750mを表示した。

ケイタイが鳴った。鳴野佐和子からの連絡だった。達也さんに誘われて、いま後樂園にいらいます、とおしえていた。

「いい加減さんが、八ヶ岳で苦労されているのに、ごめんなさい。遊んでいて……」

「謝ることはないさ。遊園地で

デートすれば、気持ちちは明るくなる。明るければ、暗い悪魔は近づきがたくなる。良いことだよ」

「東京は小雨です。八ヶ岳はどうですか」



「曇天だが、そんなにも崩れることは無い。明日はまず快晴だろう」

「インドの母と電話連絡が取れました。誘拐事件を聞いても、もう忘れなさい、というばかりです。パスポートがもらえる直後に合わせて、インド航空に予約を入れます」

「これまでと違って、佐和子さんの行動は早いな」

「早く解決したいんです。達也さんのためにも」

「自分自身のためじゃない？」

「達也さんにも生活があります。はやく大学のフールドに戻ってあげたいのです。いつまでも甘えてばかりいられませんから」

「インドで、お母さんとひざ詰めではなすとき、質問してもらいことがいくつもある、八ヶ岳から帰ったら、まとめて話すから」

井伊はその内容を一つふたつ説明した。

「長野の芦野さんという元ジャーナリストから、取材の申し込みがありました。どうしたらいいでしょうか」

彼女の口調から、その対応に苦慮しているようすがうかがえた。「最終的には、佐和子さんの判断だが、おれはいまの段階で情報を外に出さないほうが良いと思う。芝浦君とも、相談してみたら」

「さきほど、いい加減さんのケイタイがつながらなかったものですから、その間に達也さんと相談してみました。過去の事件が世



に知れず、終焉すれば、犯人の思う壺。報道や記事で、誘拐事件だと知らしめ、隠れた陰湿な犯人を攻撃したほうがいい。攻撃は最大の防御だと話しています」

「それも一つの選択肢。だが、メディアがここで報道すれば、悪魔はいま以上に、本気で牙をだす。誘拐犯は佐和子さんの住まいも、勤め先も知っているとされる。しかし、こちらは真犯人がだれか、どの人物をマークすれば良いか、まったくわかってない。攻撃だの、防御だの、といっても、あいてが見えなければ、戦いにはならない」

「わかりました。私の判断で、芦野さんにはお断りします」

「くれぐれも用心してな。閑散とした場所よりも、大勢の出入がある、大勢の目がある、後樂園のようなところが安全だ」

腕時計の高度計が1840mを表示していた。急な登りがつづいたので、井伊は小休止を取った。

鬼頭から電話が入ってきた。

「電波のつながるところに、立ち止まっている。重大な話をしているところなんだから」

「生命も重要なんです。夕方までには、なんとしても山小屋に入りたい」

「山で遭難しても、そうかんたんに死ぬ男じゃない。死神が迎えにきてても、図々しく生き延びる男だ。2万円の商品券はどこに隠した？ いま事務員に探させているが、まだ見つかってない」

鬼頭は範囲を広げて、事務所とか、休憩室とか、更衣室とかを

探させているようだ。

「会社は無法地帯ですね。見込み捜査で、令状がなくても、好き勝手に家宅搜索ができる」

「社内のいっさいのものは共有物だ、私物を入れるロッカー以外は。そこに隠しているのか、それを訊きたい」

「気になるなら、個人ロッカーも見られたらいい」

「その口ぶりだと、証拠隠滅を図り、もう換金した……？」

「私の推理だと、厚揚げメーカーの部長が経理に返却を忘れ、商品券をカバンに入れっぱなし。おおかた、この線ですよ」

「犯罪者とはかく他人に責任をなすりつけたがる」

「どんなに疑われても、私は2万円の商品券は手にしてない。この事実はずるぎない」

「サービスカウンターで発行した領

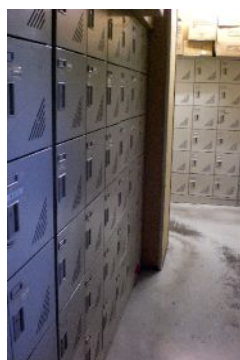
収書から、商品券の番号は調べてわかっている。おなじ番号の商品券が見つかれば、有力な物証になる」

「好きなように、どうぞ」

「開き直ってきたな」

「部長は柳下の威圧と、恫喝に負けて、12万円を支払う約束をした。その辻褄あわせで、私に嫌疑をかけている」

「語弊がある、言い方だ。メーカーの部長にしろ、セーフティーの店長にしろ、いずれかが猫ババした。これは犯罪だ。企業の信



用を損ねる、大問題だ。信用失墜の代償として、12万円は決して高くないと、判断した」

「部長の本心は、これは強請りだと判っていないながら、凄むあいてが怖くて、わが身がかわいさから、支払うことに決めた。部下への手前、それを認めたくない。部下には強いが、外の人間には弱い」

「上司にいうことばか。口を慎め」

鬼頭が怒鳴った。

「柳下がもってきたベアリング検査書には、直径のサイズがミリ単位で書かれているはず。工場のコンベアーのパーツと照合して、違っていたら、部長は柳下から12万円を取り戻して、池袋店に入金してくれますよね」

「ちよつと待て。いま、メーカーから電話が入ってきた……課長からだ。念のために、入金も確認したら、2万円が雑収入で入っていたそう。わが社の店長の疑いが晴れてよかった。部下に不祥事があると、上司まで連座で責任を問われるところだった。安堵した」

「疑うこと自体が問題だ」

「これで一件落着だ。仕事のことは忘れて、ゆつくり山を登って、夏休みの雪山を楽しんでくるといい。これから会議だ」

鬼頭はさっさと電話を切った。

「くそっ」

井伊は足もとの雪を蹴飛ばした。

本沢ロッジが見えてきた。夕日が稜線りょうせんのかなたに沈み、西の浮雲うがねいろが茜色あかねいろに染まる。東の空も、残照ざんしょうでまだ明るかった。

楽をさせてもらったトレースは稜線へとつづくが、本沢ロッジには立ち寄っていなかった。純白の雪面だった。ウサギの足跡が点々と山小屋の脇まで続いていた。

井伊は膝頭まで雪に沈みながら、10 mほど右手の山小屋まで歩み寄った。

軒下の吊り鐘かねを鳴らしてみた。カーン、カーン、と静寂せいじやくな谷間に木霊こだます。鳴野佐和子の詩に、鐘が多い。それが井伊の脳裏のうりを横切った。

かれはピッケルで入口の雪を掻いた。その上で、湿って重い引き戸を強引に開けた。

小屋の内部は、予想通り無人で寒さむとして暗かった。井伊はライトをつかって見わたした。

冬季登山者が使用できる部屋は、土間まわりの2部屋にかぎられていた。奥の客室への通路は扉で仕切られ、釘打ちくぎうちがされている。

出入口からは氷点下の冷気が流れ込む。戸を閉め切ると、真っ暗となった。ヘッドランプを天井からランプ代わりに吊るした。「21年前、ここに少女が軟禁なんきんされた。どんなに苦しい心境だったのか」



井伊は、佐和子の詩集から、『祈り、その地平線』を口ずさんだ。

魂は死なない

永遠に死なない

祈りもまた内側に

永遠に旅する魂とともに

「少女はおおいた出入口の鐘を鳴らしては、自分を励ましていたのだろう。」

だから、鐘の詩が多いのかもしれない」

長椅子に腰を下した井伊は、汗で濡れた下着を着替えるまに、寒さしの

ぎから、温かいコーヒーを淹れることに決めた。コップコップエルに水を注ぎ、バーナーを点火てんかした。青い炎が勢いを増す。土間の温度が上がってきた。湯が沸騰ふっとうすると、カップにコーヒー・ドリップを落とした。一息ひといきがつけた。

軒下の鐘がカーン、カーンと鳴り、引き戸が開いた。黄色いヤツケをきた、大柄な登山者が入ってきた。それは東中野店の三枝店長だった。

「俺のほうが早いかと思っていた」

土間に大きなザックを下した三枝は、奥蓼科の『洪しづの湯』か



ら黒百合ヒュッテ、天狗岳を経由してきたとルートを説明する。

「コーヒーを飲むか」

「ありがたい。おれのほうは酒をたつぷり持ってきたぞ。ビール、焼酎、日本酒、それがワインだ。これが山登りの最大の楽しみだからな」

三枝は徳利と猪口まで持参していた。

「相変わらず、のん兵衛だな。いっそう日本最高地点の露天温泉で、雪見酒をやればいい」

「実は、その気で露天温泉に立ち寄ってみた。イノシシが2頭いたから、ピッケルで追い払い、湯に入ろうと思い、湯に手をつけてみた。熱かったから止めた。氷点下の寒風のなかで、素っ裸になって、温泉が熱くて、なかなか入れなかったら、身体が凍りつく。大学生のころの剛毅な身体とはもうちがうからな」

三枝が、井伊の沸かしたコッヘルの湯に、日本酒の徳利を入れた。

「実際に、真冬の雪見酒をやったことがある、口ぶりだな」

「若いころは、粋がつて何度もやった。ただ、一度は懲りたことがあった。大学卒業記念の単独行で、赤岳から横岳まで縦走



したときのことだった」

縦走路の硫黄岳から、本沢の露天温泉まで下り、一人で雪見酒と洒落こんでいた。調子にのり飲みすぎた。酒のまわりが速くて、足もとはフラフラするし、稜線ルートにもどれず、この本沢ロッジに泊まった。寝込んで目覚めたら、翌日の昼だった。

三枝はさらにこういった。

「雪見酒で、行動予定が半日ずれた。それが災いして、3月15日の大学卒業式に、半日ちがいで間に合わなかった」

三枝がコッヘルから徳利を取りだし、これは熱燗だといい、ふたりの猪口に注いだ。

「そんなにも、ギリギリの行程だったのか。雪山なのに」

井伊がコンビニで買ってきた焼き鳥の缶詰を開けた。

「3日間は余裕をみていた。このロッジから天狗岳に登ったところ、冬型の天気になって、大きく崩れたんだ」

黒百合ヒュッテから「渋の湯」に下山すれば、卒業式は楽らく間に合っていた。いまの自分なら、そうする。だが、『計画は貫徹だ』と予定通り、横岳に向かったところ、2日間もビバークするハメになった。吹雪がやんでも、新雪が深くてラッセルつづき。挙げ句のはてには、卒業式に間に合わなかったのだという。

「何年前だ」

「……？ 昨年が20年永年勤続で旅行券をもらったから、21年前だ」

「蓼科ロープウェイに着いたのは、3月何日だ？」

「山頂駅に着いたのは、卒業式の前日14日だった。もうロープウェイは終わっていた。その晩は坪庭にテントを張った」

「すると、3月15日、三枝はロープウェイの山頂駅にいた。何時ころだ？」

少女誘拐事件の当日だと思うと、井伊はこれまでにない興奮を覚えた。

「15日の朝はアタックザックだけで横岳山頂を往復してきた。テントを撤収してからだと、山頂駅は10時半か、11時ころだろうな。だから、式にはアウトだったのさ」

「山頂駅で、5歳の少女と出会わなかったか？」

「5歳の女の子など興味はないさ。居たところで、気にもとめないさ」

「ほんとうか？」

「どうした、刑事のような目つきになつて、おれはむかしから年上の女が好きだった。だから、女房も年上だ。金があれば、向島か、神楽坂で、乙な年増の姐さんとチントンシヤだ」

三枝は酒の勢いから、三味線を弾くまねをした。

「よく思い出してみな。三枝の記憶のなかに、少女がいるはずだ」
「……あの子のことかな？ 山麓駅の駅舎の外に、幼い子がひとり立っていた。迷子なの？ とおれが訊いたら、『パパがあ



山に登っているの、滑ってくるのを待っているの』といった、縞枯山の斜面を指しながら。その子のことか」

「少女のそばに、母親はいなかったか？」

「そこまで、知らない。すぐロープウェイで下山した。あとはバスで茅野の駅に出た。新宿駅に着いたのは卒業式の夕方だったことは、はっきり憶えている」

「山頂駅で、少女とただバイバイとわかれた？ もっと何かあるだろう。どんな話をした？ 少女と」

「何がいたんだ」

「少女のそばに親は居ないし、三枝がうまいこといって、ロープウェイで少女を連れて下りた？」

井伊は、表情の変化を見逃さないように、三枝の顔をじつとのぞきこんだ。

「酒癖が悪いぞ。俺が女の子を誘拐したとでもいうのか」

「卒業式は間に合わなかった。それから2週間は何をしていた？」

「そんな古いことは憶えてないさ。セーフティーの入社式が4月1日だったから、おおかた、どこかの山に登っていたはずだ」

「山小屋か、テントか、どっちだ？」

「本気で、疑ってるのか。おれが蓼科で5歳の子をさらってきて、どこか山小屋にでも閉じ込めて、入社式まで一緒に暮らしていた、とでも言いたいのか。バカバカしい」

三枝が猪口の酒を一気に飲み干した。

小屋の鐘がカーン、カーンと鳴った。ふたりの視線が出入口に向けられた。引戸が開くと、青いヤッケをきた登山者が入ってきた。与謝野副校長だった。

「やはり来ていましたか。店長がこちらだと、店で聞きましたから。どうせなら、ご一緒したいと思ひまして」

与謝野はストックを立てて、濡れた手袋を取った。

（おれが裏稼業人で、鳴野佐和子の誘拐犯を追っている、与謝野は知って、ここにやつてきたのか）

井伊は、先日の池袋店のパン売場を思い浮かべた。与謝野が子連れの客と言い争いになつていた。人間は興奮すると、迂闊なことを喋ってしまう。鳴



野の文字を訊いただけで、鳴野佐和子と洩らしてしまった……。もし与謝野が誘拐犯ならば、気になつてゐる一つの失態だろう。「井伊とは、店長仲間の三枝です。寒いなかご苦労さま、熱燗で一杯どうぞ」

三枝が先んじて自己紹介をした。

「冷凍庫の見学のとき、冬山への寝た子が起きたもので。きのう在校生の終業式が終わりましたから、さつそく出かけてきました。最近（さいきん）はカメラに凝つて、一眼レフを購入しましたから、雪山の白い雷鳥（らいちょう）が撮りたくて」

「きのうが終業式で、すぐ春休みが取れるものなんですか」

井伊は、与謝野の狙いをさぐる口調で訊いた。

「多少は要領（ようりょう）ですよ」

「濡れた靴下は、バーナーのそばで乾かされたほうがいい」

三枝がそうアドバイスすると、与謝野がゴアテックの登山靴を脱ぎ、濡れた靴下を履いたまま、火のそばに両足を突きだした。（冬山に入りながら、取替え用の靴下を持っていないのか。冬山の経験者とはとても思えない）

井伊はそんな目で、与謝野のハイキング用の小さなザックを見ていた。全体に軽装備だ。雪山は天候（てんこう）が崩れたり、予想外のアクシデントが発生したりして、いつ何時（なんどき）ビバークが強いられるかわからないのに。

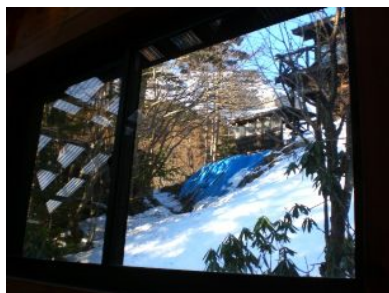
「この山小屋は無人（むじん）だったんですね」

与謝野は有人か、無人か、それすらも事前に調べていない。小屋番がいると期待し、寝袋すら持つてきていないようだ。

21年前の誘拐犯ならば、5歳の少女を2週間もここに軟禁していた。3月の本沢（もとさわ）ロッジの状況にはくわしいはずだ。与謝野にはこの山小屋の知識はまずない。

そうなると、与謝野は誘拐事件の容疑から遠のいてしまう。

「先生は社会科見学のとき、雪山の八ヶ岳の主峰（しゅほう）縦走（じゆうそう）のはなしをされていた。……。天狗岳（てんこうがく）の小屋で、寒波（かんぱ）の襲来（しゅうらい）から、難儀（なんぎ）



させられた、とか。トイレに出て行つたとき、仲間が鳴らす、小屋の入口の鐘かねをたよりに小屋に帰ってきた。……そんな体験談でしたよね」

井伊が突っ込みで与謝野に訊いた。

「入口に鐘がある小屋は、他にあったかな？ 主尾根コースで、この本沢ロッジぐらいじゃないかな」

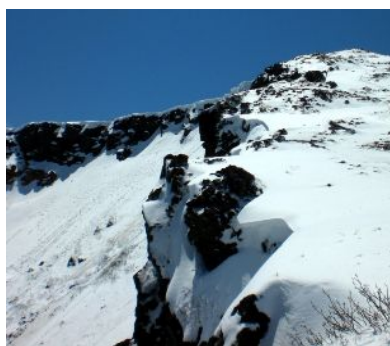
三枝が首を傾げた。

与謝野はひたすら無言で、ワインを口に運んでいた。

「先生のストックはスキー用だ。登山用とはちがう。ずいぶん使い古されているし、貫禄かんろくがある。しかし、先生はカントリースキーも、アルペンスキーもやらない、とおっしゃっていたはずだ？」

「実は、ストックは実弟から借りてきたものです。雪山だと、スキー用のほうが便利なのがあると言われている」

「白い雷鳥を撮影するには、切り立った断崖のギリギリとか、雪の急斜面に立つたりする。良いアングルを



狙うためにも。先生はスキー用のストックだけで、ピッケルをもつてない。しかもゴアテックの軽登山靴で、軽アイゼンだ。足もとがしっかりしてないと、撮影ちゅうに滑落事故かつらくを起す。危険極まりない」

真冬の赤岳から縦走した、雪山経験者だとはとても思えない、という視点で、井伊は追及しゅうかつしていた。

与謝野は仕掛けた捕獲網ほくわくあみにかかった動物のように、逃げ場がない態度だった。

「兜を脱ぎます。私は一年目の副校長でして、大勢の生徒と若い先生の前でしたから、つい大きく見せてしまった。夏山なら、二度ばかり八ヶ岳縦走はありますが、冬山は今回がはじめて。冬の八ヶ岳縦走や寒波の襲来しゅうらいのはなしは、山好きの実弟の受け売りです」

「山の話はだれでも大きくなるものさ。さあ、もつと飲んで」
ワインの瓶びんを持ちあげた三枝が、与謝野のコップに注いだ。

与謝野は恐縮きょうしゆくする態度をとりながら、こういった。

「私とちがって、一歳ちがいの弟は文武に勝まさっていた」

「文武に勝るとは、登山やスキーだけでなく、勉強もできたわけだ」

「その通り。大学4年のとき、弟は一発で上級公務員試験に合格した。私は2度も落ちた」

「試験だけがすべてじゃない」

「国家公務員はあきらめ、東京都の教員試験に切り替えた。これがまた補欠合格だった」

「補欠合格とは」

「教員に空きが出たら採用されるというもの。その権利は1年間かぎり。翌年はまた試験を受けなおす。精神的に辛いものですよ。」

とくに弟は大蔵キャリアの道をすすむ。こっちは2年間も補欠合格で、正規の職につけず、進学塾の講師でしたから」

「それは心が歪むよな。ところで、与謝野さんは、21年前の3月15日、あなたはどこにいました？」

三枝が愉快がつて、そう訊いた。

「……私の教員歴がまる21年だから、教員試験が3度目の正直で、採用合格になった年です。4月1日から勤務する、小学校が決まって、心がウキウキした日々でした」

「ウキウキしながら、3月15日はどこにいたのかな？」

「3月15日といえば、進学塾には年中行事の一つがありました。

御三家（開成、麻布、武蔵）の中学校に合格した生徒たちを、一泊

で招待旅行をする日でした。八ヶ岳観光と、バーベキュー大会です。場所はこの麓にある稲子リゾート温泉で、進学塾の寮がありましたから、そちらで合格パーティーと宿泊です」

山崎勉の細君が雑務の手を貸していた、進学塾だろう。この場で、それを持ちだすと、誘拐事件当日の追及が逸れてしまう。

「その日をくわしく話して、みてくれませんか」

井伊が質問を取り返した。

「この年は、御三家の中学校に8人も合格させることができました



た。2人は小学校の卒業式とぶつかり参加できなかった。私は茅野駅前でレンタカーを借りて、運転手兼が観光ガイドです。6人の子が車に乗っていました」

与謝野は蓼科ロープウェイで坪庭に登らせたり、清里の中華レストランで昼食を取らせたり、松原湖で遊ばせてから、稲子リゾート温泉の別荘にむかったという。

他の講師はさきに別荘にきて、バーベキューの支度をしていた。翌日は全員が、小諸市内を見学し、城内で記念撮影をする。それは来期の塾の募集用パンフレットに使われる、写真になるそして列車で東京に帰っていたという。

「先生が蓼科ロープウェイにいかれた日、5歳の少女が消えた。この事件について、先生はなにかご存知ないですか」

「事件はわかりませんが、坪庭の遭難事故なら、知っています。カー・ラジオで聞きましたから。子どもたちも車内で聞いていました。気の毒でしたね。行方不明の子は見つからなかったんですよ」

与謝野はラジオで聞いたという内容を説明した。それは佐和子が国会図書館で見つけた、と同時に芦野守から見せてもらった、当時の『毎朝長野』の新聞記事とほぼおなじ。

「細かくよく覚えてる」

「身近で発生した事故ですからね。人生のなかで、そうあることじゃないし、記憶に残りました。新聞も、丹念に読みましたから」人間はだれしも、事故や事件のそばに居合わせたならば、TV

を見たり、新聞を読んだりつよい関心を持つだろう。

（レンタカーには12歳の6人の目があつた。与謝野が少女を誘拐できるはずがない？）

井伊の推理から、与謝野の犯人説が外れてきた。

出入口の鐘がカーン、カーンと鳴った。引き戸が開き、冷気が流れ込んできた。赤いヤツケをきた冒険スキーヤーの山崎勉だった。スキー板を立てかけた。

「蓼科から一日で突破とは、すごい」

井伊がいった。

「八ヶ岳はわが家の庭だ。バーナーの火とはお寒いことだ。いま石油ストーブを出してくるから」

山崎が封鎖されていた通路の扉を開けると、勝手知った奥からそれを出してきた。灯油をつぎ込み、点火させた。石油ストーブの暖かさが全身を包んだ。山崎は、鴨居にランプを吊るした。

「テレビ局のクルーはきていないけど？」

井伊が灯火代わりだった、ヘッドランプをザックに片付けながら訊いた。

「むこうから取材を申し込んでいながら、なんだ。マスコミとはいい加減なものだな。まあ、こつちも退院したばかりだ。無理することはない。あしたの硫黄岳の滑降は取り止めだ」



「そうだ、奥さんから伝言があつた」

「いやな予感がするな」

「硫黄岳の断崖から、思う存分、飛び込んできてください、保険金は掛けておきますから、未練なく。子どもは私がしっかり育てます、というメッセージです」

「そんなことだろうと思った。うちの女房はいちどもスキーを観にきたこともないくせに、俺の腕を侮っている。だから、おれはスキーで稼いだ金は、1円も家に入れてやらないんだ」

「あしたは硫黄岳まで登り、雪崩の怖れがあつたから止めた、そんな理由があつたほうが良いと思うけど？」

「それはいい知恵だ。じゃあ、硫黄岳に登っておくか。夫婦喧嘩すれば、俺の口よりも、女房のほうが上だし。『子どもの前で、ウソをつく、離婚します』と誓約書を取られているし。子どもをそばに連れてきて、問い詰められると、ウソのいい訳はできないし」

山崎の顔の表情から判断すれば、かなり子煩悩らしい。

「山崎さんは、21年前の3月15日は、どこにいました？」

三枝が酒を勧めながら、訊いた。それは井伊はこんなことを聞きたいのだろう、と酒の場の余興に似た、先回りだった。

「振舞い酒とありがたい。急に言われてもな……？　ことしは銀婚式だ。あんな女房とよく連れ添ったものだ。21年前とは、25年から差し引くと、結婚してから4年後か」

「奥さんは今年で、まる20年だといってた」

井伊が口をはさみ、質問を取り返した。

「女は、そういうことはよくおぼえている。蓼科スキー場の民宿のしごとは毎年、3月半ばまでで終わり。桜の便りが聞こえると、スキー客が極端に少なくなるから、あとは民宿の夫婦だけでやっていける。おれのほうは1、2週間くらい骨休みをして、山小屋の仕事に入る。ゴールデンウィークに備えて、準備が忙しいから」

雪で壊れた建物の補修からはじまり、食料や雑貨などの荷揚げ、全室のすべての布団干し、食堂のメニューの値段を書き換え、TVの映りを調整したり、部屋の掃除、トイレの準備をしたり、やることはやたら多いと、山崎は流暢にならべた。そのうえで、本沢ロッジと天狗岳小屋は



経営者がおなじだから、一ヶ月では足りないくらいだと思っただけだ。

「21年前の3月15日は、蓼科スキー場から、あんたが少女を連れさった日だ？」

三枝が酒で鈍った呂律で、またしても割って入った。その質問のなかには、おれは犯人じゃないぞ、という三枝の態度が如実にあらわれていた。井伊へのあてつけでもあった。

「あれは誘拐事件でなく、山の遭難事故だ。よくおぼえている。

民宿のしごと納めが前日で、終わっていた。俺は15日の朝から一日券を使って、山頂駅から滑っていた。夕方、稲子に引き揚げのために、荷物を取りに民宿に寄ったら、オヤジが、5歳の女の子がいなくなった、いまに警察や報道陣がくるはずだ、民宿にも宿泊客が割り振られて忙しくなるから、少女が見つかるまで、しごとを延期してくれ、とたのまれた。おれは16日から本沢ロッジに入る。山小屋に入れば、目がまわる忙しさだ、1日が大切だといって断った」

「実際は、1、2週間の骨抜き休みだった……」

井伊が質問を取り返し、山崎の性格を見透かす口調で訊いた。「まあ、そうだが。区切りのついた仕事の延長なんて、やる気は全然なかった。うちの女房は、俺がどこで働いても、給料は本人には渡さないで、振込みにしてくれ、とたのんでいるんだ。俺が余計に働いても、余分な金は俺にまわってこない。ひとつの得にもならないから、断った」

「断った理由は別にある。蓼科スキー場で、5歳の少女を誘拐してきて、稲子登山口から、本沢ロッジに連れてきた。井伊店長はそう言いたいんでしょ」

こんどは与謝野副校長が山崎を犯人扱いで、訊いた。

「俺が女の子を誘拐した？ そんなことする人間じゃない。あんたは学校の先生だろう、そんなふうにな人を疑うものじゃない」

山崎が不快な顔で、反発した。

「5歳の女の子なら、体重は20キロあるかないか。山崎勉さん

は山小屋の番人だ、強力だ。少女を縛って背負子で連れてこれる』
与謝野の追及がなおもつづいた。

「ただ酒は飲むものじゃない」

室内が三つ巴で、だんだん険悪な雰囲気になってきた。

井伊は3人の顔を一人ひとり見た。奇妙な偶然だが、少女誘拐事件が発生した当日に、この3人は蓼科スキー場にいたのだ。これはまぎれもない事実だ。

（だれが真犯人なのか。誘拐犯がこのなかにいるとすれば、そのものは、26歳の嶋野佐和子の顔を知っているのだ）

井伊はふとわが身の危険を感じた。真犯人は、この自分が裏稼業人だとわからないまでも、誘拐犯を追っている、と気づいているはずだ。誘拐犯は酒を飲んでいるし、大胆な突飛に行動に出る。そのことからしても、深夜、自分が寝入ったところ、登山ナイフなど寝首を搔かれる怖れがある。

「テントを購入してきた。今夜は寝心地を確かめてみる」

井伊はザックを背負って、戸外に出ていった。

満天の星空だった。星明りとライトとで、急斜面を登った。谷間から露天温泉の硫黄のつよい臭いが漂う。そのガス中毒を警戒し、さらに離れた。山風が遮断された岩陰で、テントを張った。



かれはエアマットを敷き、寝袋に入った。誘拐犯が殺意をもったならば、ライトで雪の足跡を辿って追ってこれる。そんな警戒心は消えなかった。

【つづく】

写真モデル・森川詩子さん

詩集「受容」(有本多企画・小林陽子さん(詩人)

写真提供(ロープウェイ関連) (株)ピラタス蓼科ロープウェイ

写真提供(インド)・インド政府観光局

【協力者および提供者は、本文とまったく関係ありません】